第10課　神の永遠の福音

【暗唱聖句】

「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」黙示録14：12

【日曜日・三天使のメッセージ】

「わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て大声で言った。」黙示録14:6

三人の天使が一人一人使命を携えて登場します。この三人の天使はそれぞれ違うことを言っているのですが、互いに結びついています。ですから、三つで一つとも言えます。地上では獣である悪魔が猛威を振るう中、大空高くに天使が舞っている光景は厳粛な感じを強く受けます。大空高くというのは全世界にこのメッセージが届けられるということを意味しているものと思われます。また、天使は永遠の福音を携えていると述べられていますが、福音は変わることがないということ、そして三天使の使命とはまさに福音そのものであることがわかります。「大声で言った」とは、全世界のあらゆる人々が耳にすることになる重要かつ緊急のものでることを現わしています。なぜならば永遠の運命に関係しているからです。「御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る」（マタイ24章 14節）と言われたイエス様の言葉とも通じます。

【月曜日・第一天使のメッセージ】

「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」黙示録14:7

「神を畏れ、その栄光をたたえなさい」…神様を畏れることと、その栄光をたたえることはセットです。詩篇22：24にも次にように書かれてあります。「主を畏れる人々よ、主を賛美せよ。ヤコブの子孫は皆、主に栄光を帰せよ。イスラエルの子孫は皆、主を恐れよ。」神様を畏れるとは、神様に恐怖するというのではなく、神様を真剣に受け止め、日々の生活の中に常にご隣在されているのを認めることです。終末時代の神の民は、神を真に畏れる民たちです。コヘレトの言葉12章14節にも「すべてに耳を傾けて得た結論。「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ、人間のすべて。神は、善をも悪をも一切の業を、隠れたこともすべて裁きの座に引き出されるであろう」とあるように、神様を畏れることを聖書は一貫して教えています。

「神の裁きの時が来たからである」…なぜ神様を畏れ、栄光をたたえるのか、それは神の裁きの時が来たからです。第一天使のメッセージは真の礼拝への最後の招き、言葉を変えるなら、悔い改めへの最後の招きです。創造主を礼拝する人には良き知らせですが、それを拒むものにとっては裁きの警告でもあるのです。もちろん神様は一人も滅びることを望んではおられません。だから、黙示録の言葉を残されたのです。

「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」第二ペテロ3：9

「天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」…これは永遠の福音を告げ知らされたものたちの喜びの応答です。正しい神を、創造主なる神を礼拝せよとのメッセージは、創造主が正しく礼拝されていないということの表れでもあります。また創造主とあえて言うことで、わたしたちは神様によって造られた存在でることを強く意識します。また創造の記念日である安息日の重要性も意識させられます。

【火曜日・第一天使のメッセージ２】

黙示録を読んでいくと、最終時代には神様を畏れ、創造主を礼拝する人たちと、獣を恐れ、獣を礼拝する人たちに分かれていくことがわかります。このことは10戒の最初の4つに対して違反することになります。

第一条「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

第二条「あなたはいかなる像も造ってはならない。」

第三条「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。」

第四条「安息日を心に留め、これを聖別せよ。」

十戒の最初の4つの掟の中心概念は礼拝です。黙示録は最後の危機の中で神様への忠誠心が鍵になることを示唆しており、善と悪との大争闘は十戒のこの4つの掟を中心に展開されていきます。第一天使の「「天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」という言葉は、「六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」という出エジプト記20：11の言葉から引用されています。そのことから第一天使の使命には安息日の回復が含まれるのです。神の印を受けるのか、それとも獣の印を受けるのかは、わたしたちが誰を、どのように礼拝しているかで決まるのです。

【水曜日・第二天使のメッセージ】

「また、別の第二の天使が続いて来て、こう言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。怒りを招くみだらな行いのぶどう酒を、諸国の民に飲ませたこの都が。」黙示録14:8

第二天使は、バビロンは倒れたといいました。バビロンとは何でしょう。バビロンは実際にあった古代都市ですが、第二天使はそこは「怒りを招くみだらな行いのぶどう酒を、諸国の民に飲ませたこの都」だと言います。ぶどう酒は正しい判断ができなくなることを象徴しています。では、正しい判断を失わせるこのバビロンという古代都市が象徴しているものは何でしょうか。

1. 神様の教えに逆らう現代文明やこの世の繁栄を表しています。現代文明が私たちの生活をより豊かにするのだと多くの人が考えています。しかし、それは神様からわたしたちの心をそらすものに満ちています。
2. 第一天使の使命とも関係して、天地万物を造られた方を礼拝しないものはバビロンの心で生きているということになります。それを象徴するのが、バビロンの王、ネブカデネザル王の言葉です。ダニエル４：２７

「なんとバビロンは偉大ではないか。これこそ、このわたしが都として建て、わたしの権力の偉大さ、わたしの威光の尊さを示すものだ」

つまり、バビロンとは自分を神とする。自分に頼り、まるで自分の力で生きていると勘違いしている人々を指しているのです。しかし、そのような人はやがて倒れるときが来るのです。

1. 偽りの教会を指します。黙示録17：5に「バビロンは淫婦どもの母」と表現されています。母（女）は教会を指すわけですが、この場合は正しい教会ではなく偽りの教会であることがわかります。具体的にはカトリックと背教プロテスタント教会との融合を含む、偽りの宗教制度の連合体です。

この世の文明や栄華、高ぶる人々、それらが偽りの宗教と一つなった世界がバビロンと言えるかもしれません。エレン・G・ホワイトは次のように解説しています。

「教会と世俗との結合がキリスト教国全体において完全に行われるとき、初めてバビロンの堕落は完全なものとなる」（各時代の大争闘下P92）

【木曜日・第三天使のメッセージ】

「また、別の第三の天使も続いて来て、大声でこう言った。「だれでも、獣とその像を拝み、額や手にこの獣の刻印を受ける者があれば、14:10 その者自身も、神の怒りの杯に混ぜものなしに注がれた、神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、また、聖なる天使たちと小羊の前で、火と硫黄で苦しめられることになる」黙示録14:9

さて、それでも神に立ち返ることを拒むならばどいうなるのか、それが第三の天使のメッセージです。「神の怒りの杯に混ぜものなしに注がれた、神の怒りのぶどう酒を飲む」とは、神様の裁きが容赦なしに臨むということです。「火と硫黄で苦しめられることになる」とは、完全に滅ぼすことを意味しており、火と硫黄は裁きの道具としての象徴です。

ところで、この獣を拝むという自覚を持って生きている人はまずいません。しかし、神を礼拝せずに生きるということは、逆に獣を拝んでいるのと等しい結果を生むのです。つまり、獣の心がその人の心を支配するようになっていきます。ネブカデネザルは高慢な思いにとらえられたあと、獣のようになりました。

「ネブカドネツァル王よ、お前に告げる。王国はお前を離れた。4:29 お前は人間の社会から追放されて、野の獣と共に住み、牛のように草を食らい、七つの時を過ごすのだ。そうしてお前はついに、いと高き神こそが人間の王国を支配する者で、神は御旨のままにそれをだれにでも与えるのだということを悟るであろう。」4:30 この言葉は直ちにネブカドネツァルの身に起こった。彼は人間の社会から追放され、牛のように草を食らい、その体は天の露にぬれ、その毛は鷲の羽のように、つめは鳥のつめのように生え伸びた」ダニエル4:28

獣を拝み続けるなら、人間性を失ってしまうことでしょう。最近の様々な事件を見ていると、まさに人間性を失ってしまった姿をそこに見ます。神様の裁きのときは近づいています。だから、「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要」（黙示録12：14）なのです。